

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 16 集

1 9 9 0

宇治市教育委員会

宇治市埋藏文化財発掘調査概報

第 16 集

1 9 9 0

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では、宅地開発や道路建設があいつぎ、それに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加しています。

本書は、宇治市教育委員会が平成元年度に行いました開発事業に伴う緊急発掘調査と立会調査の概要をまとめたものです。

平成元年度に行いました緊急発掘調査は4件、立会調査は10件です。そのなかで、宇治市街遺跡においては、中世の宇治の状況を窺う遺構・遺物の検出とともに、古墳時代から平安時代の遺構・遺物も発見でき、宇治市街地の成立過程の一端を知ることができました。また、矢落遺跡では中世の木製品や遺構が発見され、旧巨椋池畔での人々の生活の有様を窺うことができました。

本書が多くの方々目にふれ、広く宇治の歴史解明に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた開発事業者の方々を始め、調査期間中に協力いただきました機関・各位に心よりお礼申し上げます。

平成2年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

1. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第16集である。
2. 本書が収録する調査は、平成元年度に本市教育委員会が開発に伴い実施した緊急発掘調査及び立会調査である。緊急発掘調査は下記の4件である。

番号	遺跡名称	調査地	調査原因	経費負担者	調査期間	調査面積
1	矢落遺跡	宇治樋ノ尻86-1他	学校建設	総本家山崎商店	平成元年 7月～9月	300㎡
2	宇治市街遺跡	宇治壱番46	建物建設	天理教宇治田原分教会	平成元年 9月	120㎡
3	宇治丸山古墳	宇治琵琶45-1	用地造成	宇治市	平成元年 11月～12月	50㎡
4	宇治市街遺跡	宇治妙楽162	共同住宅建設	トーア株式会社	平成2年 2月～3月	115㎡

3. 本書が収録する発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課 主事	杉本宏
	同	主事	前田暢
調査事務局	同	参事	頼成綾子
	同	社会教育課 課長	池田正彦
	同	文化係長	吉水利明
	同	主任	山本敦子
	同	主事	梅田正人
調査指導	京都府教育庁文化財保護課		
調査補助員	内田貴則・竹村 充・堀 泰隆・大前朋恵・志村みどり 長谷川陽子・前田昭代・山岡万里子		

4. 本書が収録する調査の出土遺物・写真・実測図は、本市教育委員会が保管している。
5. 本書の編集は、社会教育課が行い、編集実務及び執筆については杉本宏が担当した。また、木器樹種鑑定については、徳丸始朗氏にお願いをした。



平成元年度緊急発掘調査地位置図

平成元年度における埋蔵文化財調査の動向

平成元年度において、宇治市教育委員会へ提出された文化財保護法57条の2・3に基づく届出・通知件数は17件であり、このうち4件について発掘調査を実施し、他の10件については立会調査の指導を行った。

上記の4件は、開発に伴う事前調査、すなわち緊急発掘調査であり、開発事業者の依頼により本市が受託事業として実施したものである。また、立会調査は、工事による遺跡への影響が少ないと判断される場合、工事实施時に担当職員を現地に派遣し、工事による遺跡への影響の状況を確認するとともに、不時に出土した遺物の保全を行ったものである。

平成元年度における埋蔵文化財包蔵地の開発状況は、件数的にはほぼ前年度なみであり、開発規模も比較的小規模なものが多い。開発の内容は、共同住宅建設が目立ち、ここ数年における当地域での地価高騰の影響が看取できる。

このような緊急調査以外に、本市では国・府の補助金交付を受けて重要遺跡の確認調査を2件実施した。庵寺山古墳と五ヶ庄二子塚古墳の調査がそうである。

本書が収録する調査は、上記のうち、緊急発掘調査と立会調査の概要である。

(緊急発掘調査)

矢落遺跡は、旧巨椋池南岸の平野部に広がる遺物散布地であり、今回、栗村金属の工場跡地にフィリップス大学日本校が建設されるのに伴い、発掘調査を実施したものである。当該地は旧巨椋池南岸の水田地帯を厚い土盛りにより整地し、工場を建設したところであり、遺跡の検出は、計画地の南部、すなわち丘陵よりの部分においてしか無理であろうと予想されたため、計画地の南西部において試掘調査を実施した。結果的には、現地表下3.5mの地点で、中世の遺構・遺物を検出したものの、遺構面上には無数の足跡と思われる凹凸が見られたため、当地は遺跡の中心部にあたるのではなく、旧巨椋池に続く湿潤地と判断でき、本試掘調査をもって、調査を終了することとした。

宇治市街遺跡は、現在の宇治市街地一帯に広がる古代から近世に至る集落跡であり、今回2地点において発掘調査を実施した。一つは、本町通りに面した宇治壱番46での天理教神殿建築に伴うものであり、もう一つは、都市計画道路に面した宇治妙楽162での共同住宅建設に伴うものである。

前者では、地表下1.5mで中世の遺構面を検出し、多数の柱穴・溝等を発見した。また、整地層中からは奈良時代に比定できる土器が出土し、下層遺構として中世以前の遺構の存在を窺わせた点で注目できるものであった。

後者では、地表下1.5mで平安時代後期の木組井戸を始め、古墳時代終末から奈良時代の遺物を含む溝を検出し、中世の宇治町屋成立前史を知るうえで興味深い資料を得ることができた。

宇治丸山古墳は、全長37m程の前方後円墳であるが、墳丘の大半は大正年間に削平されており、この時に変形四獣鏡を始めとする遺物が出土している。今回の調査は、本市の新庁舎建設計画に伴い、古墳残丘と伝えられる部分が造成されることとなったため、発掘調査を実施したものである。結果としては、古墳に関する遺物の出土はなく、中世から近世にかけての陶器類が出土したに留まった。

(国庫補助金等による発掘調査)

前述したように、上記4件の緊急調査以外に2件の発掘調査を補助事業として実施している。

庵寺山古墳は、直径56mの大型円墳であり、大型の蓋形埴輪の出土により著名な古墳である。本年度は、本墳保護に係る予備調査として墳頂部を調査し、中心主体が大型墓壙をもつ粘土槨であることを確認するとともに、盗掘壙内より多数の家形埴輪を含む埴輪片を採集した。

五ヶ庄二子塚古墳は、全長110m程の2重周濠を備えた前方後円墳であり、本年度は周濠周囲に残る堤の調査を実施した。堤は、近世後期に改修が行われており、当初の堤は、その下に埋没していることが判明した。

この2件の発掘調査の報告については、『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第15集』に収録した。

本文目次

1. 矢落遺跡発掘調査概要

(1) はじめに	1
(2) 調査の概要	2
(3) 遺構	2
(4) 遺物	3
(5) まとめ	6

2. 宇治市街遺跡(宇治壺番46)発掘調査概要

(1) はじめに	7
(2) 調査の概要	8
(3) 遺構	9
(4) 遺物	11
(5) まとめ	14

3. 宇治丸山古墳残丘部発掘調査概要

(1) はじめに	15
(2) 調査の概要	16
(3) まとめ	18

4. 宇治市街遺跡(宇治妙楽162)発掘調査概要

(1) はじめに	19
(2) 調査の概要	20
(3) 遺構	21
(4) 遺物	23
(5) まとめ	25

5. 埋蔵文化財立会調査概要

平成元年度の状況	26
----------	----

6. 三室戸寺子院跡出土木製品樹種鑑定報告

(1) はじめに	28
(2) 樹種鑑定結果	28

挿 図 目 次

1. 矢落遺跡発掘調査概要

第1図 調査地位置図(1:5000)	1
第2図 北壁土層図	2
第3図 遺構実測図	3
第4図 出土遺物実測図	4
第5図 出土木製品実測図	5
第6図 調査地位置図(1:5000)	7
第7図 調査地地形図	8
第8図 東壁土層図	9
第9図 遺構実測図	10
第10図 溝S D 15出土遺物実測図	11
第11図 溝S D 36・S D 38出土遺物実測図	12
第12図 整地層出土遺物実測図	13
第13図 調査地位置図(1:5000)	15
第14図 宇治丸山古墳出土変形四獣鏡(註1より)	16
第15図 トレンチ配置図	17
第16図 出土遺物実測図	18
第17図 調査地位置図(1:5000)	19
第18図 調査地地形図	20
第19図 遺構実測図	21
第20図 井戸S E 02実測図	22
第21図 溝S D 02・包含層出土遺物実測図	23
第22図 井戸S E 02出土遺物実測図	24

第23図	出土木製品実測図	25
第24図	平成元年度立会調査位置図	27
第25図	井戸S E 27出土木製品実測図	28

図 版 目 次

矢 落 遺 跡

- 図版第 1 (1) 調査地の状況(北から)
 (2) 調査地北部の遺構検出状況(北から)
- 図版第 2 遺構完掘状況(北から)
- 図版第 3 (1) 足跡検出状況(南から)
 (2) 足跡完掘状況(西北から)
- 図版第 4 (1) 遺構完掘状況(北から)
 (2) 下層出土の倒木(北から)

宇治市街道遺跡(宇治壱番46)

- 図版第 5 (1) 本町通りと調査地(東から)
 (2) 調査地の状況(北から)
- 図版第 6 (1) 調査地全景(北から)
 (2) 溝S D 36 b・S D 38の状況(西から)
- 図版第 7 (1) 溝S D 36 bの状況(南から)
 (2) 調査地南部の状況(北から)
- 図版第 8 (1) 調査地北部の状況(北から)
 (2) 調査地北部整地層断ち割り状況(北から)

宇治丸山古墳残丘

- 図版第 9 (1) 調査地の遠景(南から)
 (2) 調査地の遠景(西から)
- 図版第10 (1) 調査風景(南から)
 (2) Aトレンチ完掘状況(南から)

- 図版第11 (1) B・Cトレンチの状況(南から)
(2) Cトレンチ断ち割りの状況(西から)

宇治市街遺跡(宇治妙楽162)

- 図版第12 (1) 調査地の状況(西から)
(2) 遺構検出状況(西から)

- 図版第13 (1) 完掘状況(東から)
(2) 溝S D 02の状況(南から)

- 図版第14 (1) 井戸S E 02上面検出状況(南から)
(2) 井戸S E 02木組検出状況(南から)

- 図版第15 (1) 井戸S E 02木組細部の状況(南から)
(2) 井戸S E 02完掘状況(南から)

三室戸寺子院跡出土木製品樹種鑑定

図版第16 顕微鏡写真(1)

図版第17 顕微鏡写真(2)

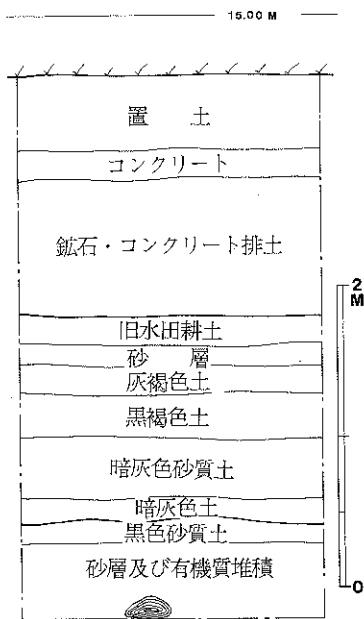
1. 矢落遺跡発掘調査概要

(2) 調査の概要

当該地は、宇治郵便局と府道宇治小倉停車場線をはさんだ向い側であり、かつて粟村金属工業の工場及び鉾石置場となっていたところである。調査開始段階では、すでに工場建物は一切撤去されており、整地されていた。工場が建てられる前は、府道より北側は水田地帯となっており、南側は茶畑が展開していた。

調査にあたっては、開発予定地の南部、すなわち遺物散布地により近いところで、かつ工場の建物がなかった部分にトレンチを設定することとした。トレンチは、東西10m、南北30mの規模とし、発掘調査を進めることとなった。

調査は、まずパワーショベルによる置土・旧水田土の排除より始めた。工場建設及び工場撤去に伴う置土は、約1.5mの厚さがあり、その下に旧水田面を確認した。旧水田下層は、無遺物の砂層や黒褐色系の土層が約1.4m程堆積しており、その下層に黒色砂質土をベースとする遺構面を検出した。遺構面上及び黒色砂質土中には自然木の細片が散見された。遺構面の標高は12m程であり、南から北へ向ってゆるやかに傾斜している。遺物は概して希薄であり、遺構面上に土器片・瓦片・木器片が散見されたに留まる。層厚15cm程の遺構ベース層下には、砂層と木葉や自然木の堆積層が互層となってさらに50cm以上続くが、詳細な状況は涌水が激しく確認できなかった。



第2図 北壁土層図

当初の計画では、本トレンチにおいて遺構・遺物が密な状況で発見された場合、さらに調査範囲を拡大する予定であったが、遺構・遺物が全体的に希薄であったため、本トレンチの調査記録を作成し、調査を終了することとした。

(3) 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、溝・土壙・足跡である。いずれも黒色砂質土を掘り込んだものである。以下に主要なものについて説明を加える。

溝 S D 01 は、トレンチのほぼ中央付近で検出した、幅40cm程、長さ18m程、深さ10cm程の素掘の南北溝である。溝の中央付近は2m程途切れており、2本の溝のように見えるが、本来はつながっていたものと思われる。埋土は淡褐色の砂質土であり、土師器の細片を少量含んでい

た。

土壙SK03～07は、トレンチ北西の断ち割り溝ぞいで検出した遺構であり、南北1.4～1.8m、東西2.5m程、深さ10～30cm程の規模である。埋土は、いずれも黄褐色砂層であり、上面の精査の段階でも鮮明にその範囲が確認できた。埋土中には余り遺物を含まず、SK05より若干の瓦片を出土したに留まる。

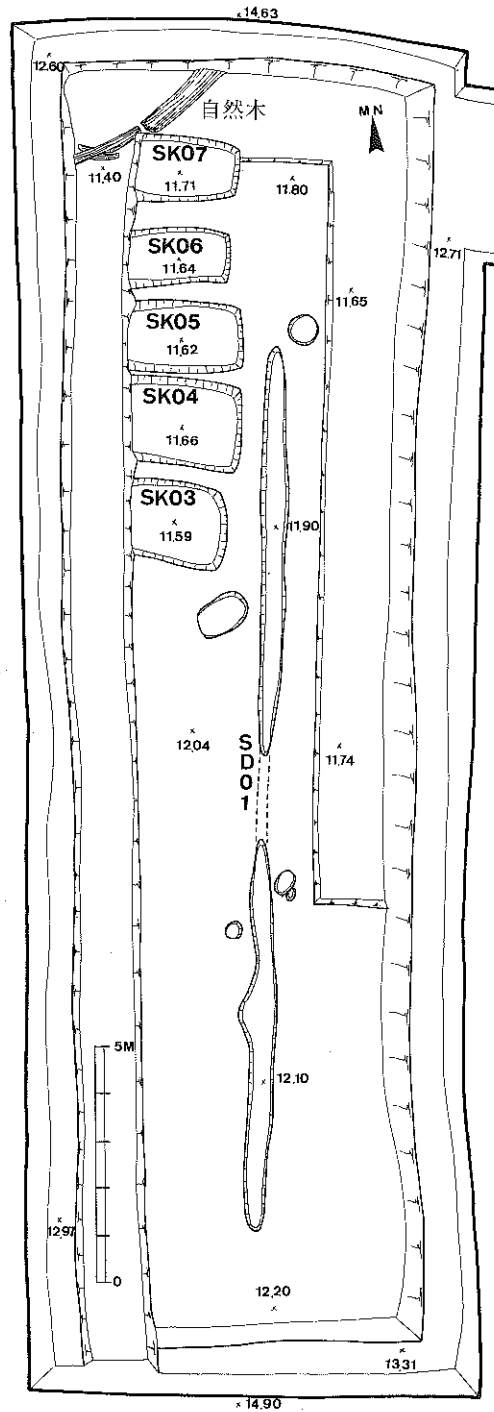
また、遺構面全体にわたって小さな凹が無数に確認できた。この凹は特にトレンチ南半に集中する傾向があり、埋土は砂層であるため、明瞭に識別できた。凹の形状は不定形であるが、重複しないものに関しては、概ね長さ20cm程、幅10cm程の長円形状のものであり、状況的に人間の足跡であると判断できる。

他に柱穴らしい円形土壙を数個検出したが、まとまりはなく、建物にはならない。

(4) 遺物

出土した遺物は、土師器・陶器・磁器瓦等がコンテナ1箱程、木製品及び植物遺体がコンテナ10箱分程ある。

土器類に関しては、細片化しているものが多く図示できるものは少ない。第4図1・2は土師器の皿であり、13世紀代に比定されるものである。ともに遺構面よりの出土である。3は、白磁碗でありベースの黒色砂質土直下で出土した。4～7は、いずれも平瓦の破片であり、4



第3図 遺構実測図

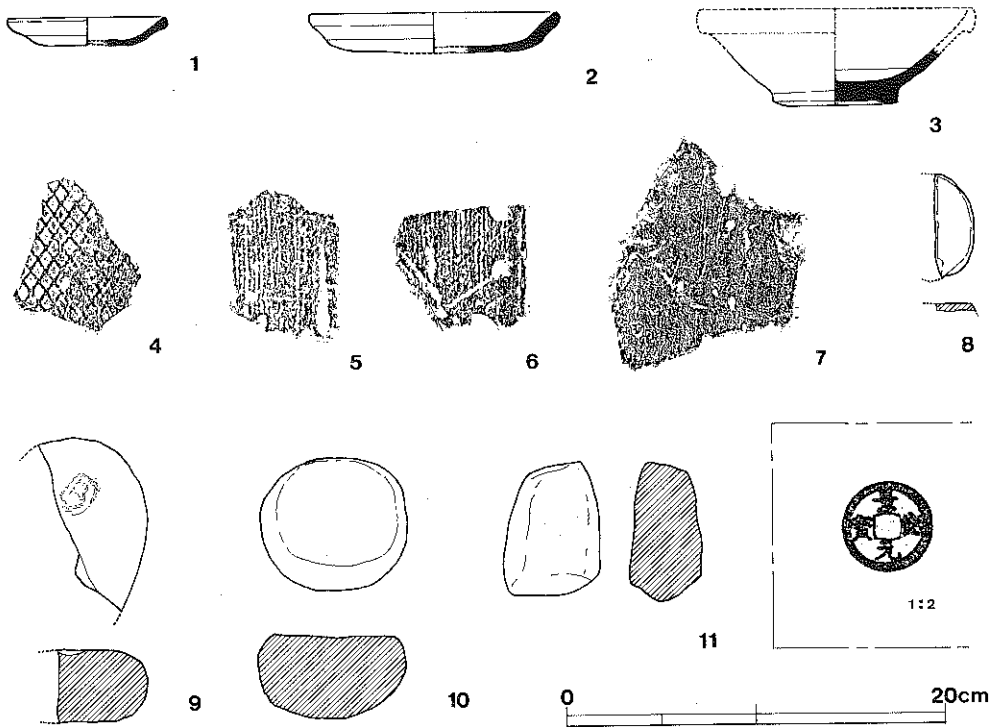
1. 矢落遺跡発掘調査概要

の凸面には格子タタキが、5～7には縄タタキが認められる。瓦片は、土壙SK05より出土している。また、8は粘板岩製の石製品の破片であり、銭貨は、北宋銭の景德元寶(初鑄年1044)である。ともに遺構面上の出土である。

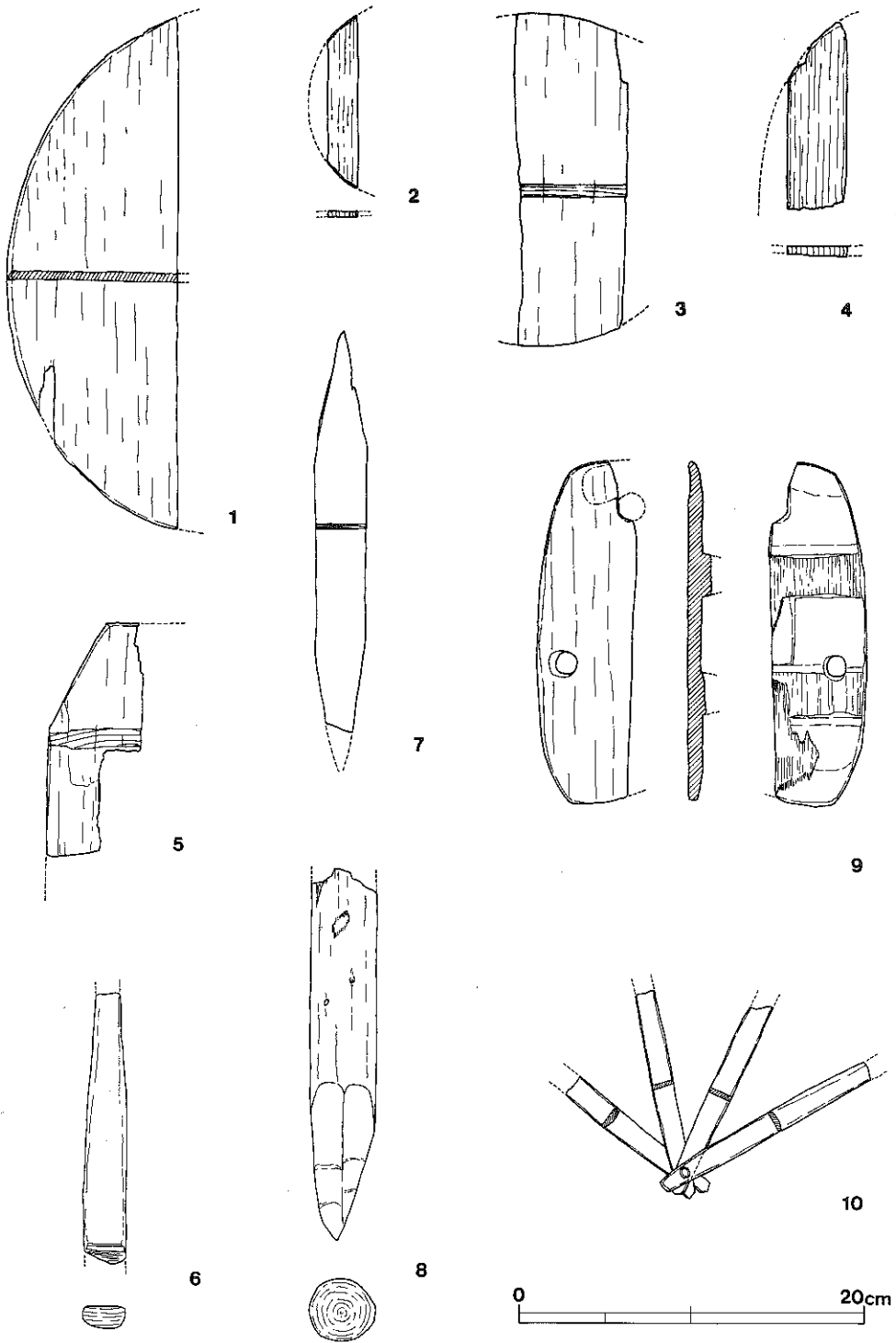
9～11は、ベースの黑色砂質土層下の砂層内より出土した石器であり、縄文時代に比定されるものである。9は花崗岩製の叩き石、10は石材不明の磨石、11は石斧と思われる。

木製品・植物遺体については、ほとんどが遺構面上で出土している。第5図1～4は、曲物の底板の一部である。おそらく杉材と思われる。5は多角形状に加工された板材の一部、6は棒状品の一部である。7は、両端を尖らせた板材であり、用途は不明である。8は、広葉樹の幹ないし枝を利用した杭の一部である。9は下駄の破片であり、歯は削り出しにより作られている。10は、扇の骨であり、4本の骨の下端に木製のピンを打ち、開閉できるようにしてある。ここに図示したもの以外に、板材の破片や小型の角材の破片・ヘギ板の破片等が少なからず出土している。

遺構面下の砂層より出土した縄文時代の石器類を除けば、他の土器類は概ね13世紀代のもので占められており、木製品の多くも同様な年代のものと判断できる。また、瓦片については白鳳から奈良時代のものであり、混入品と思われる。



第4図 出土遺物実測図



第5图 出土木製品実測图

1. 矢落遺跡発掘調査概要

(5) ま と め

以上、調査の概要について述べてきたが、ここで整理をし本発掘調査のまとめとしたい。

1. 今回の調査で検出した遺構の年代については、遺構面上に散見できた遺物から概ね13世紀頃のものだと判断できる。遺構の性格については、不明なものが多いが、遺構面上に多数の足跡が残されている事から判断すれば、当地は湿潤な土地柄だったことが理解でき、集落を営むには不向きな場所であったと思われる。周辺の地形から考えれば、調査地の南方に広がる標高15～17m程の平坦地部分に集落の中心を考え、今回の調査地その北方に広がる湿地帯に近い部分であったと思われる。但し、湿潤な土地とはいえ、溝・土壙等の遺構が認められることから考えれば、集落周囲での人々の何らかの活動の場であったことは確かである。

2. 中世遺構面下の砂層中より、縄文時代の石器が発見されたことは、付近に縄文遺跡が存することを窺わせるものであり、今後、周囲の調査においては、この点を考慮する必要がある。

3. 現在、旧巨椋池周辺での発掘調査件数は余り多くなく、豊臣秀吉による大岡堤築堤以前の巨椋池の状況及びその周囲での遺跡の状況には不明な点が多い。今回の調査地の北西1km地点で昭和63年に調査をした小倉環濠集落では、標高11mで安定した中世の遺構面を検出しており、今回の調査地が標高12mで湿潤地であることを考えると、かつての巨椋池畔線の復元は、かなり複雑なものとなる。このような状況が、池を取り囲む微地形に起因するのか、また巨椋池の時代ごとによる姿に起因するのか、今後確かめてゆく必要がある。

2. 宇治市街遺跡(宇治壺番46)発掘調査概要

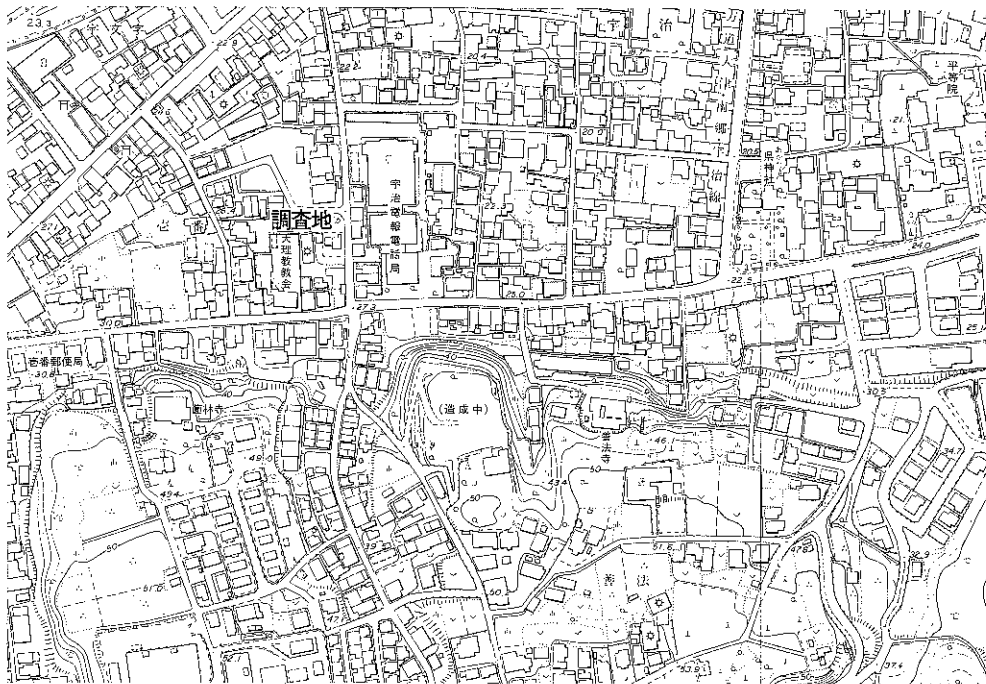
(1) はじめに

本発掘調査は、宇治壺番46において、天理教宇治田原分教会により計画された神殿建設に伴い実施したものである。

調査地は、本町通りぞいの一角であり、木造神殿北側の駐車場部分にトレンチを設定した。

宇治市街遺跡は、現在の中宇治の市街地一帯に広がる古代から近世にかけての集落跡で、過去の調査により、市街地の地下に各時代の遺構が比較的良好に遺存していることが判明している。また、現在の本町通りそのものが、平安時代後期以来踏襲されている道であり、今回の調査地がこの道に面することから、良好な遺構の検出が期待された。

トレンチは神殿建設予定部に設定することとなったため、本町通りより北へ20m程奥まった地点での設定とはなったが、後述するとおりの成果を得ることができた。現地調査の実施期間は、平成元年9月11日より同9月29日までの18日間であり、調査面積は120㎡である。



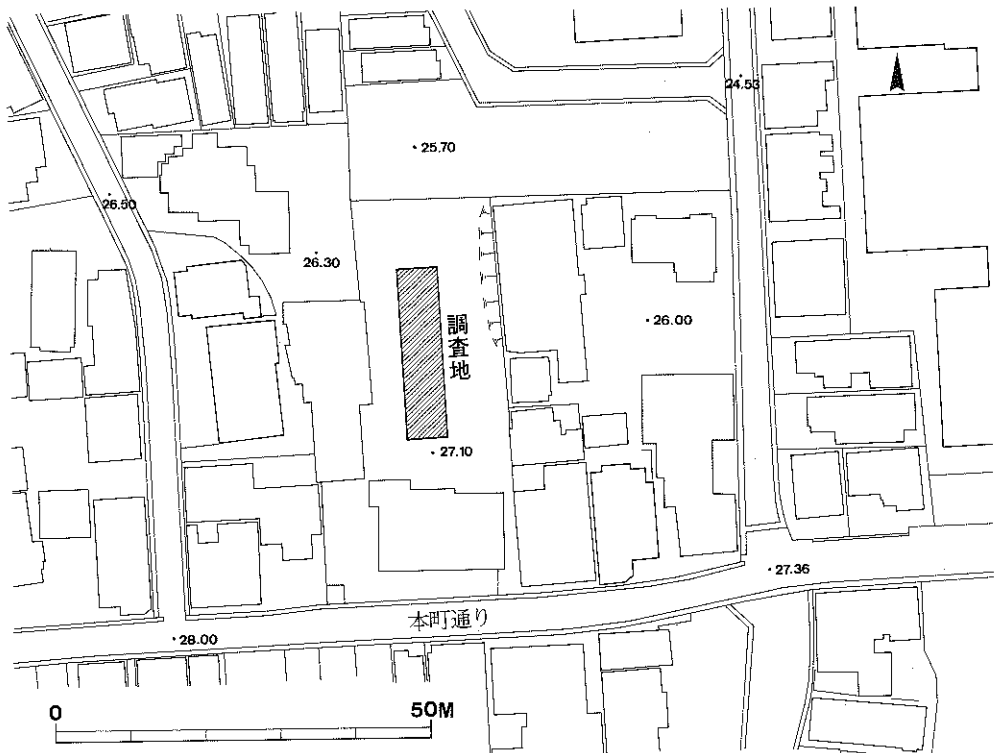
第6図 調査地位置図(1:5000)

2. 宇治市街遺跡(宇治宅番46)発掘調査概要

(2) 調査の概要

調査は、まず神殿建設予定地のほぼ中央部分に幅5m、長さ22mの南北トレンチを設定し、表土等の排除をパワーショベルで行うことより開始した。

当地は現在の宅地化に伴い、北側に盛土することにより宅地を平坦化しているため、遺構面の検出は、トレンチ北側ほど深くなることを予想したが、現地表下1.7m地点で、黄褐色砂質土の地山と淡褐色砂質土の整地をベースとするほぼ平坦な中世の遺構面を確認し、この面上で遺構の検出を行うこととした。中世遺構の検出及び記録作業完了の後、調査地内の北側に広がる整地層の除去を、トレンチ東壁・北壁ぞいで実施し、下層遺構存否の確認作業を行った。整地層は、北へゆるやかに傾斜する地山上に、トレンチ北端部で50cm程の厚さで盛土されていることが理解され、この地山上に少数ながら遺構が存在することが理解できた。この下層遺構内よりは遺物の出土がなく、その年代の決め手を欠いたが、整地層中より、奈良時代に比定される土師器・須恵器を採集することができ、下層遺構の年代について、概ねの手懸かりを得ることができた。下層遺構の追究については、調査日程上、完全には実施できなかったが、初めて奈良時代に遡る遺構・遺物を確認したことは大きな成果であった。



第7図 調査地地形図

(3) 遺 構

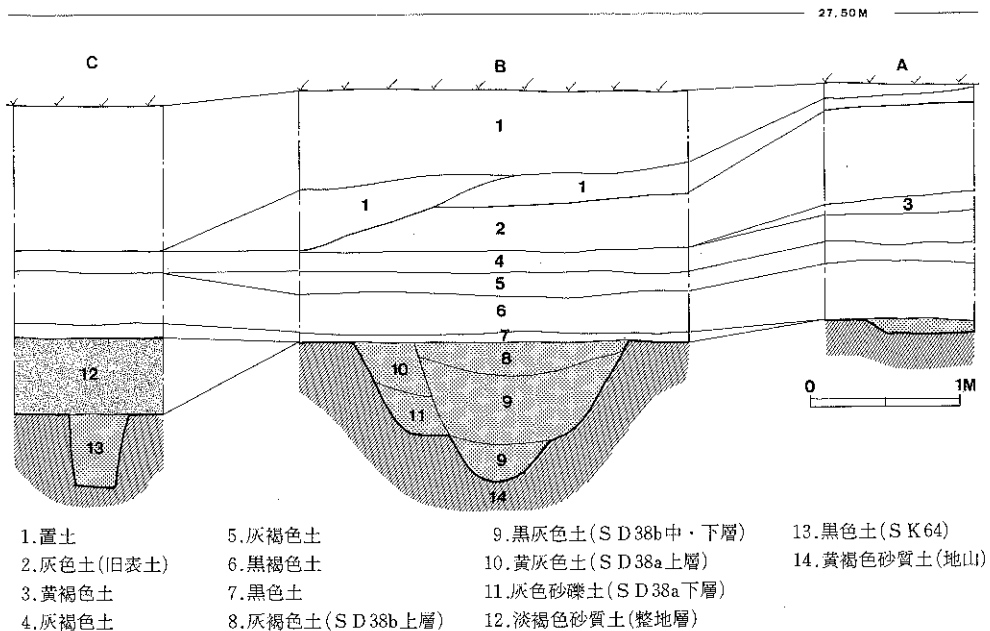
今回の調査で検出できた遺構は、溝・土壇・柱穴等であり、約70箇所を確認した。大半は中近世に比定できるものである。総じて遺構密度は高いといえる。以下に、主要遺構について説明を加えることとする。

(中・近世の遺構)

溝S D 15 トレンチ南端で検出した幅1~1.8m程の素掘りの東西溝である。深さは約20cm程である。埋土は暗褐色砂質土であり、埋土中より瓦器・陶器等の破片が出土した。遺構の埋没時期は16世紀末頃と思われる。

溝S D 36 トレンチ北半部で検出した「L」字形の溝であり、東西部分をS D 36 aとし、南北部分をS D 36 bとした。S D 36 aは、幅1.2m、深さ0.8m程の規模であり、トレンチ西端ではほぼ直角に北に折れ曲りS D 36 bとなる。S D 36 bについては、溝西肩が調査地外であるため、幅については不明である。埋土は、基本的に黒色土であり、部分的に地山の土である淡褐色砂質土及び礫が混在していた。埋土中からは、瓦・土師器・須恵器・瓦・陶器等が出土しており、遺構の埋没年代は16世紀前半から中頃と思われる。

溝S D 38 トレンチ中央付近で検出した東西溝であり、西側をS D 36 bにより破壊されて



第8図 東壁土層図

2. 宇治市街遺跡(宇治巻番46)発掘調査概要

いる。SD38には、改修が認められ、古い段階のものをSD38a、新しいものをSD38bとする。SD38aについては、SD38bにより大きく破壊されているため、幅は不明である。深さは60cm程であり、SD38bよりやや浅い。SD38bは、幅1.5m、深さ1m程のもので、黒色ないし黒灰色系の土を埋土としている。遺物は主にSD38bより出土し、土師器・輸入磁器・陶器・石製品が認められる。埋没年代は16世紀前半頃と思われる。

建物SB66 トレンチ南部で検出した掘立柱建物で東西2間分、南北4間分を確認している。年代は不明。

その他の遺構 他に柱穴及び土壙が多数あるが、遺物に乏しく、年代の決め手を欠く。しかし、埋土の状況は上述した遺構と類似するものが多数を占めるため、基本的には15～17世紀を中心とする遺構群と判断できる。また、整地層については、SD38より北側に認められ、トレンチ北端で厚さ50cm程となっている。

(7～8世紀の遺構)

上記の中・近世遺構の他に、若干の7～8世紀代と思われる遺構が存在する。

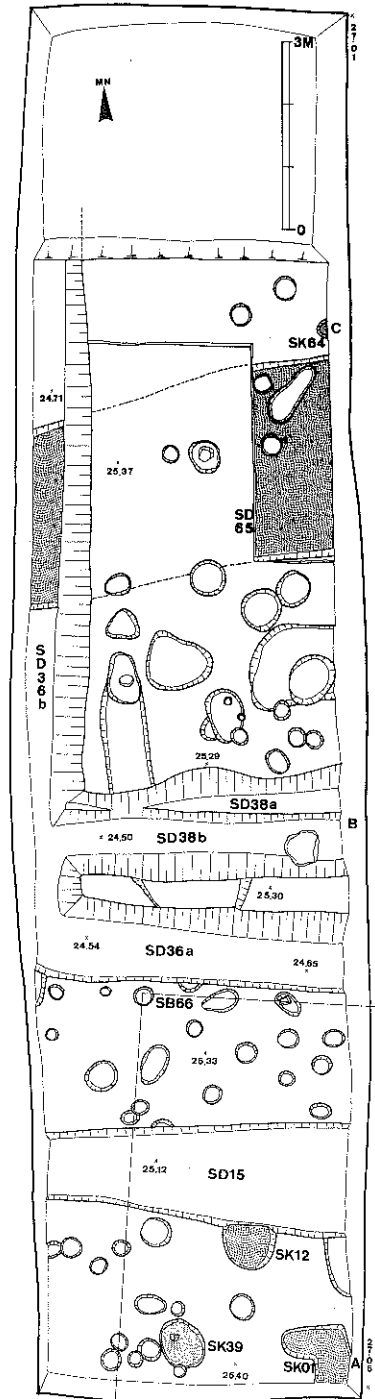
土壙SK01 トレンチ南東端で検出した不定形土壙で、埋土中に須恵器・土師器の甕を含む。

土壙SK12 トレンチ南部で検出した円形土壙で、埋土中に須恵器・土師器の甕を含む。

土壙SK39 トレンチ南端で検出した竈状遺構で、中に焼けた石製支柱が立てられていた。埋土は焼土・炭であり、若干の土師器が出土した。

土壙SK64 整地層下の柱穴。無遺物。

溝SD65 整地層下の東西溝。幅3m、深さ15cmを測る。無遺物。



第9図 遺構実測図

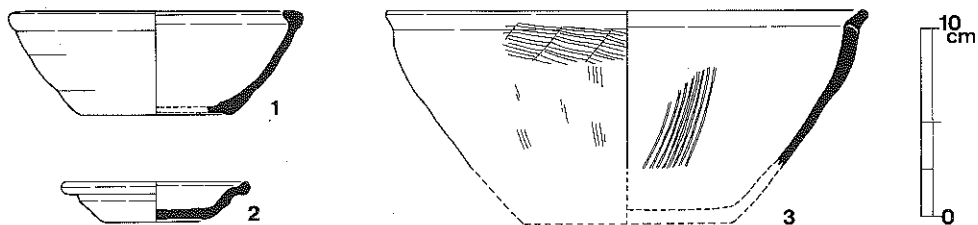
(4) 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦・石製品があり、出土量はコンテナで6箱分程である。全体的に破片化しており、図示可能な個体は少ない。以下に主要な遺構を中心にその状況について説明をすることとした。

溝S D 15出土遺物 本遺構より出土した遺物には、土師皿、瓦器の椀・深鉢・スリ鉢・風炉、陶器では皿・鉢・常滑の大甕、瓦等の種類が認められるが、破片が多く図示できるものは少ない。第10図1は、直径15cm程の陶器の鉢であり、器壁は薄く硬く焼成されている。輸入陶器の可能性はある。2は、瀬戸の灰釉小皿であり、表面に淡黄緑色の釉が施されている。3は瓦器のスリ鉢であり、外方に短く開く口縁部をもつ。外面には粗いハケを残し、内面には櫛状工具で施された条痕が認められる。年代的には16世紀後半のものが多い。

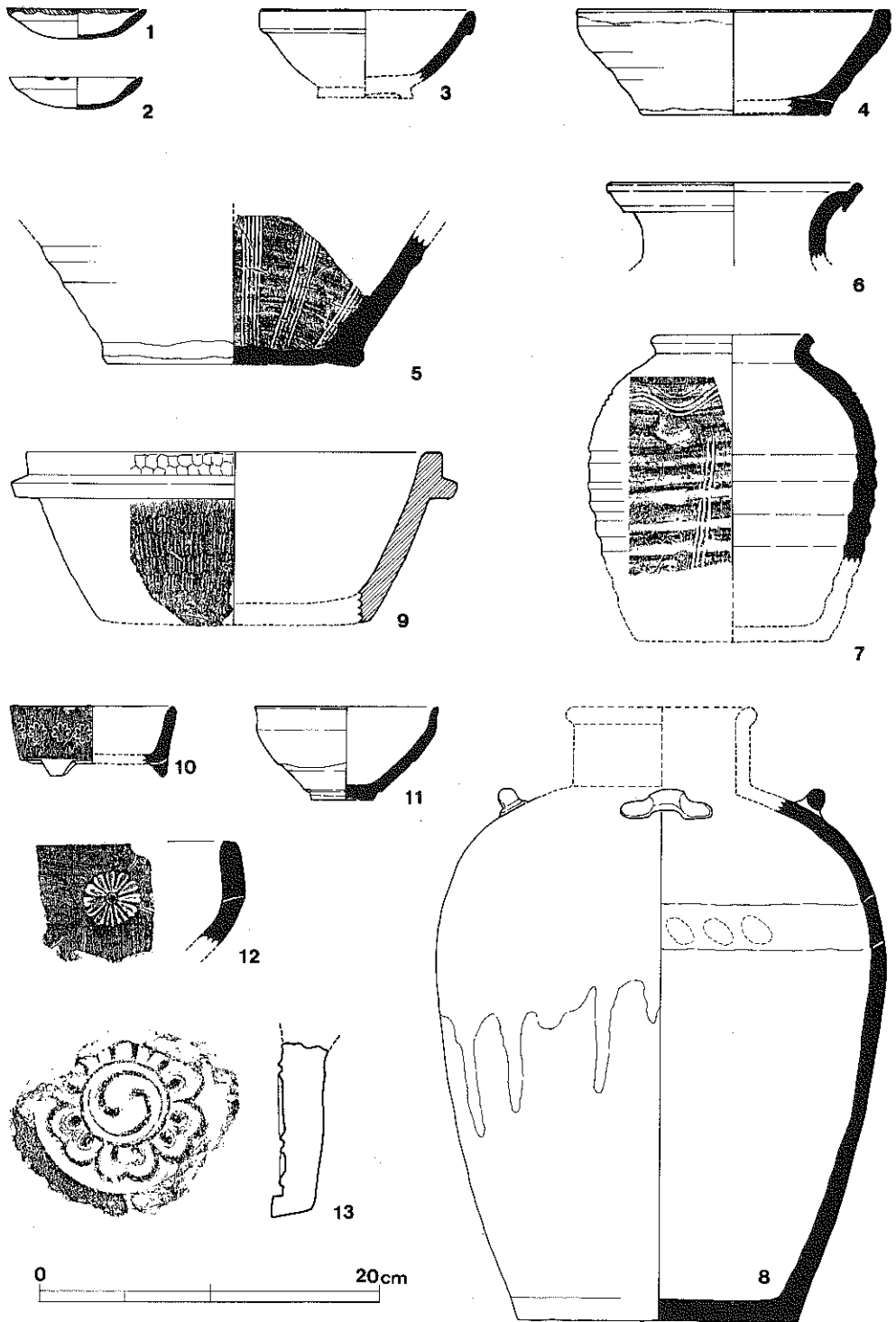
溝S D 36出土遺物 本遺構より出土した遺物には、土師器・瓦器の香炉・火鉢、天目茶碗、瓦等の遺物がある。第11図10は、瓦器の香炉であり、体部外面に花文のスタンプを押捺し、底部に3個の脚を付す。11は瀬戸と思われる天目茶碗であり、内面及び外面上半に茶褐色の釉を施す。12は瓦器の火鉢の口縁部片であり、体部外面に菊花文を押捺している。13は、複弁蓮華文軒丸瓦で、中房に二巴文をもつ。平安後期に比定でき、河内向山瓦窯の製品と思われる。主要な遺物の年代は15～16世紀代であり、14世紀のものを若干含む。

溝S D 38出土遺物 本遺構より出土した遺物には、土師器・瓦器の壺・羽釜・火鉢、陶器では備前の鉢・壺、常滑の壺・大甕、信楽のスリ鉢等がある。第11図1・2は直径8cm程の土師皿であり、口縁部に油煤の痕跡を残すため、燈明皿として使用されたものであることがわかる。3は輸入磁器の白磁椀である。4は備前の鉢であり、表面は茶褐色を呈する。5は信楽のスリ鉢であり、内面に櫛状工具による条痕をもつ。6は常滑の壺口縁と思われるものである。口縁部は「N」字状を呈する。7は備前の壺である。肩部に櫛目波状文を施し、体部下半に縦方向の櫛目直線文を施す。8は備前の四耳壺である。体部上半に濃い緑色の自然釉が厚くかかっている。9は滑石製の石鍋である。外面にはノミ状工具による加工痕が良く残っている。主要な遺物の年代は15～16世紀代であり、13～14世紀のものを含んでいる。



第10図 溝S D 15出土遺物実測図

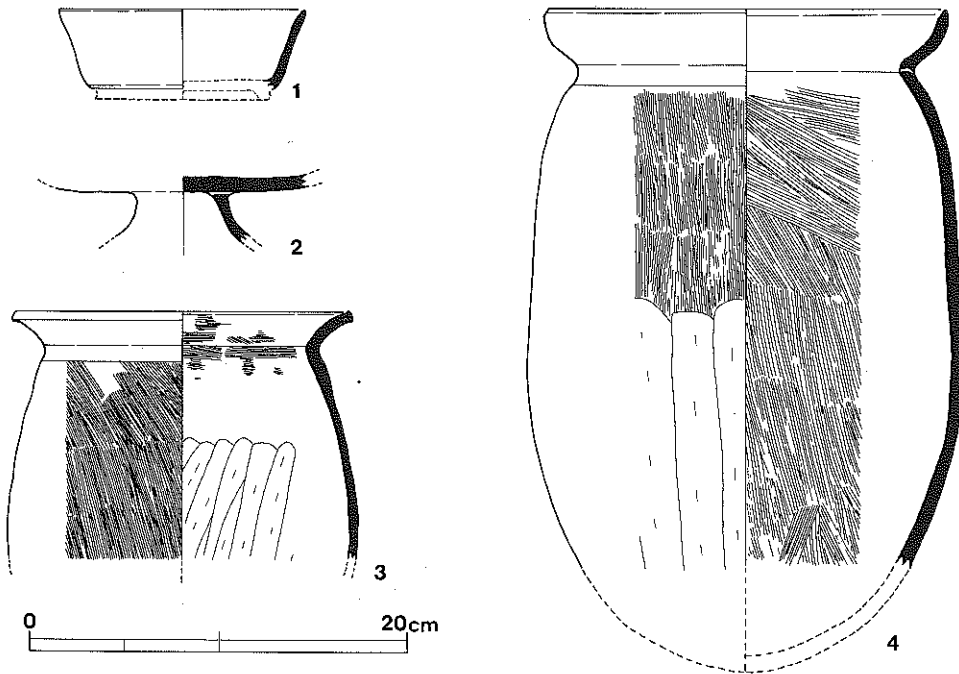
2. 宇治市街遺跡(宇治荅番46)発掘調査概要



第11図 溝 S D36・S D38出土遺物実測図

整地層出土遺物 調査地北半に広がる整地層内より、土師器の甕、須恵器の杯・高杯・甕が出土している。第12図1は須恵器の杯であり、底部に高台を付すものと思われる。2は須恵器の高杯であり、平らな杯部に低い脚を付すものである。3は土師器の甕であり、「く」字形に外反する口縁部に長胴の体部をもつものと思われる。外面は、細いハケ調整であり、内面下半にはタテヘラケズリが認められる。4は土師器の甕であり、内湾する口縁部と長胴の体部をもつ。外面はタテハケの後、下半をタテヘラケズリしている。内面はタテハケ調整のみである。図示できなかったが、須恵器では、内面にかえりを持つ杯蓋の破片が出土している。整地層出土の遺物の年代については、1・2が概ね8世紀代に、3・4が概ね7世紀の後半代に比定できる。

今回の調査で出土した遺物の年代別の量を図示できなかったものも含め、全体的に見まわすと、圧倒的に多いのは、15世紀から16世紀代に比定できるものであり、陶器・瓦器がその中心を占めている。次に多いのは、13世紀から14世紀に比定できる一群であり、やはり陶器・瓦器が中心である。11世紀から12世紀代のものについては、土師皿や黒色土器などが散見できるが、量的には極めて少ない。7世紀から8世紀にかけての遺物は、当該時期の遺構・整地層出土のものだけでなく、後世の遺構内からも少なからず出土している。17世紀以降の遺物については、基本的に認められない。



第12図 整地層出土遺物実測図

(5) ま と め

今回の調査結果について、その概要をのべてきたが、ここで整理をし本報告のまとめとしたい。

1. 今回検出した遺構面における主要な年代は、遺物からみて15世紀から16世紀代、すなわち室町時代中頃から織豊時代にかけてであり、遺構の状況より当地が本町通りぞいの宅地として利用されていたことが理解できる。

13世紀から14世紀代、すなわち鎌倉時代に比定できる遺物も比較的多く認められるため、当地の宅地としての利用は鎌倉時代に始まると見てよいが、遺構的には、後の時代と比べる調査地内では希薄である。

2. 調査地北半に広がる整地層の年代については、当層に中世期の遺物を全く含まないため、鎌倉時代の宅地利用に伴うものと判断できる。

3. 中・近世遺構の下層に、ほぼ旧地形を利用するかたちで、7世紀後半から8世紀代にいたる集落跡の存在が明らかとなった。今までの当遺跡の調査で検出した遺構・遺物については、11世紀以降のものに限られており、宇治市街遺跡の成立過程を考える上では注目すべき成果である。

以上、本調査の成果について簡略にまとめた。調査面積が限られているため、検出遺構の総合的検討についてはやや無理な面があり、今後、周辺地での調査によって残された課題については答えてゆきたいと考える。

最後になったが、京都府埋蔵文化財調査研究センターの伊野近富氏からは本報告をまとめるにあたりご教示を得た。感謝する。

3. 宇治丸山古墳残丘部発掘調査概要

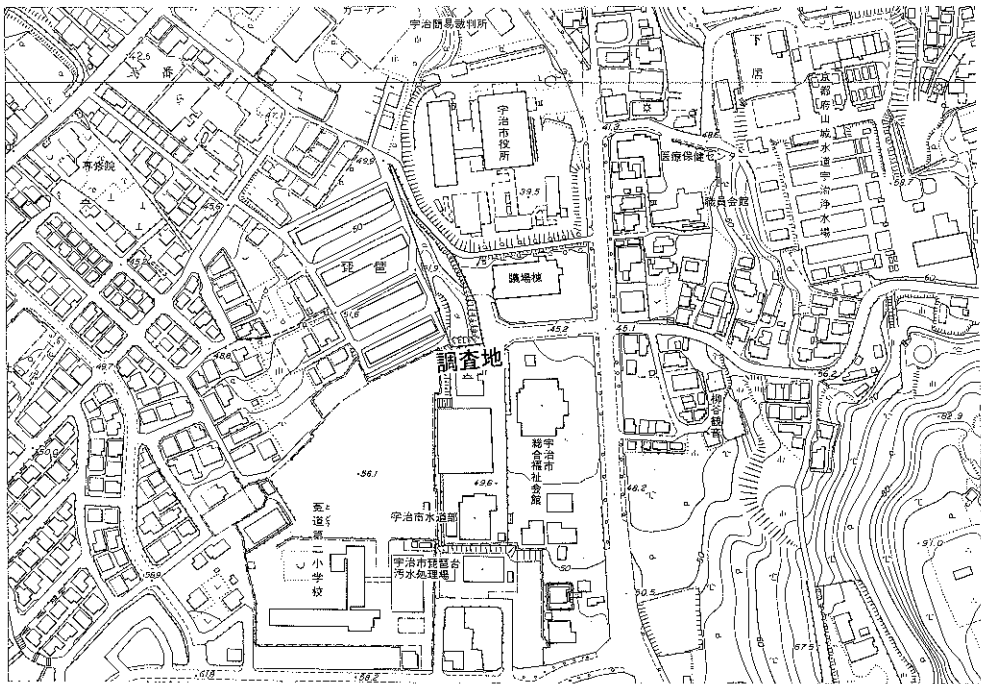
(1) はじめに

本発掘調査は、宇治琵琶45-2において、宇治市により計画された倉庫用地造成に伴い実施したものである。

調査地は、宇治市庁舎議会議棟の西側にあたり、南北に細長く旧地形が残されていたところである。調査地の西側はユニチカ株式会社の社員寮がある。

宇治丸山古墳については、大正12年に京都府より刊行された報告^{註1}によると、全長37m程の南面する前方後円墳で、大正元年の地ならしに伴い主体部が破壊され、仿製変形四獣鏡や鉄製武器類が出土したとされている。出土遺物は、現在、東京国立博物館が収蔵している。

本古墳は、その後の開発によってほぼ消滅状態となったが、今回、宇治市が造成を計画した用地内に宇治丸山古墳の残丘と伝えられる高まりが存在しており、その内容確認のために調査を実施することとなった。調査期間は、平成元年11月13日より同年12月1日までであり、調査面積は50m²である。



第13図 調査地位置図(1:5000)

3. 宇治丸山古墳残丘部発掘調査概要

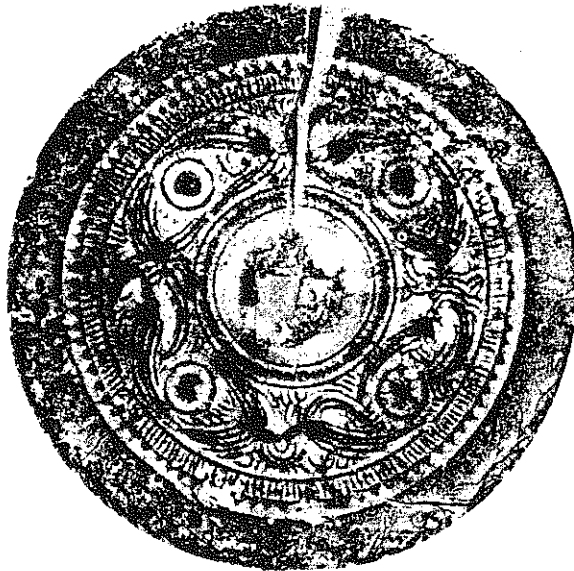
(2) 調査の概要

宇治丸山古墳残丘と伝えられる高まりは、東西10m、南北20m、高さ3m程で、台地端にそって細長く残っており、西側は、ユニチカ株式会社社員寮造成に伴い削り取られ、高さ4m程の崖となっていた。残丘東側も後世の土取りによって旧地形を損っており、踏査時には、この高まりがはたして古墳に関するものか否か判断不可能であった。

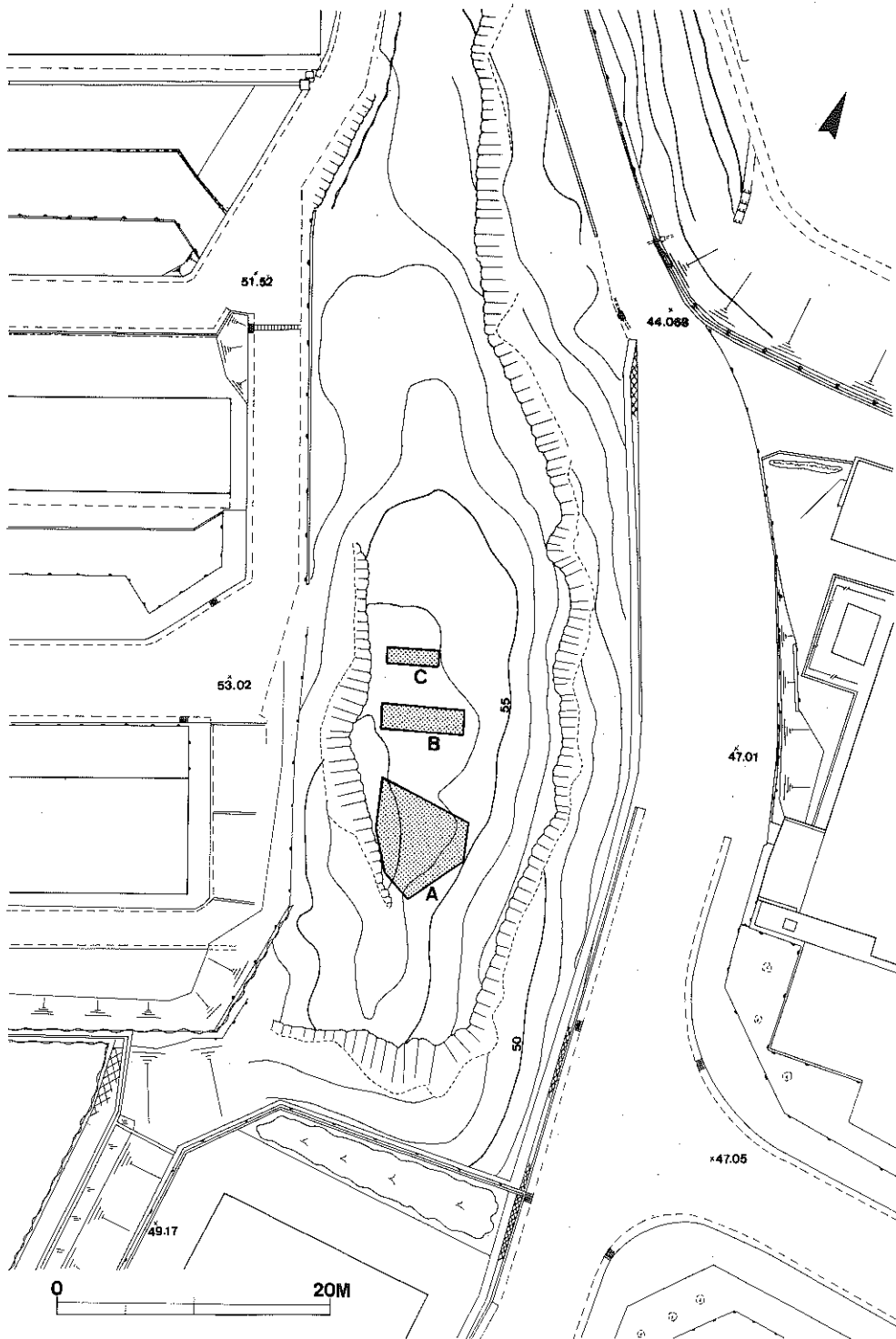
調査は、この伝古墳残丘部にA～Cの3地点のトレンチを設定し、内容確認を行うこととした。調査の結果、A地点においては、表土直下は直ちに黄褐色土・赤褐色土の地山を検出し、B・C地点においても、20～30cm程の流土を除去すると直ちに同様な地山があらわれた。A地点においては、念のためにトレンチの拡張を行い、地山での地形の有様を追及したが、古墳に関するような徴候は認められなかった。

出土遺物は、すべて表土からの出土であり、量としてはコンテナに1箱分程である。遺物の種類は、土師器の甕(第16図3)、東播系のスリ鉢(第16図5)、瓦器スリ鉢(第16図6)を始め、伊万里の椀(第16図1・2)、信楽のスリ鉢(第16図7～11)、唐津の三島手の皿(第16図4)などが認められる。出土遺物の全体的な様相としては、一部に14世紀に溯るものが含まれるが大半は16世紀から18世紀にかけての、いわゆる近世陶磁器類であり、古墳に関するものは一切出土していない。

以上のような状況から、調査の拡張は不必要と考え、調査を終了することとした。

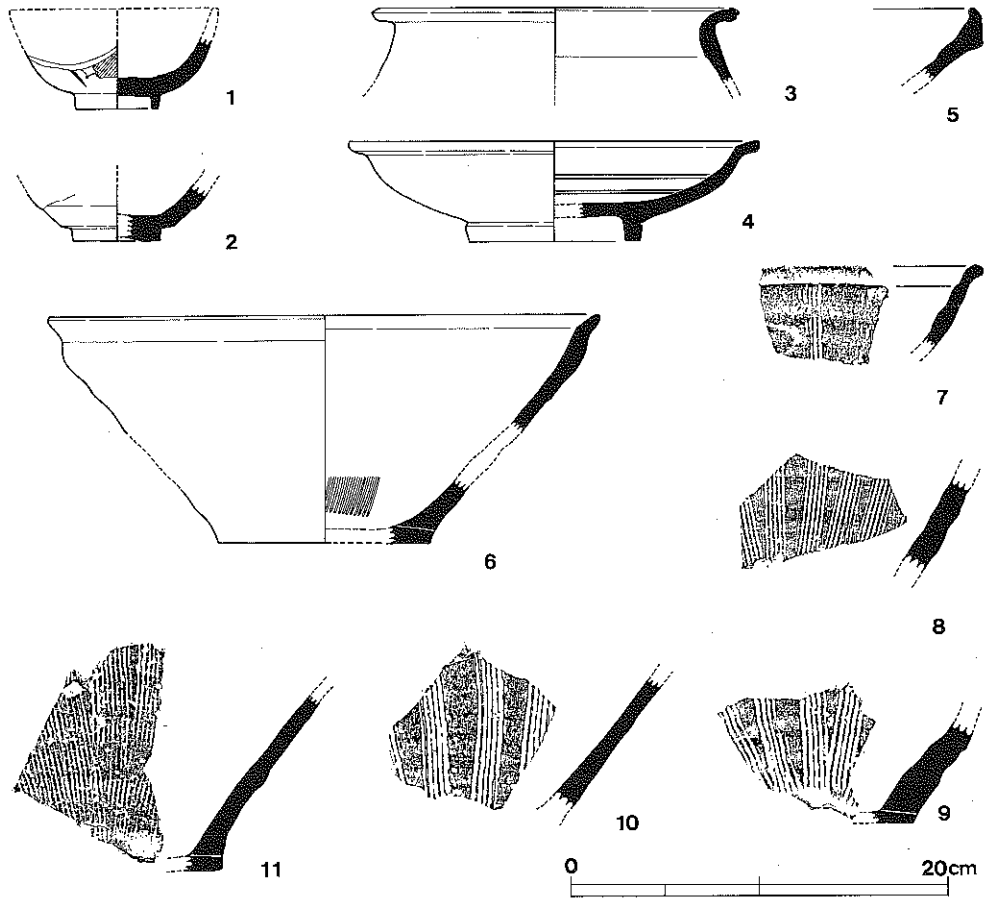


第14図 宇治丸山古墳出土変形四獣鏡(註1より)



第15図 トレンチ配置図

3. 宇治丸山古墳残丘部発掘調査概要



第16図 出土遺物実測図

(3) ま と め

前述した京都府の報告から検討すれば、今回の調査地付近に宇治丸山古墳が存在したであろうことは確かであるが、調査地での状況からすれば、伝宇治丸山古墳残丘とされた高まりは自然地形の可能性が高く、宇治丸山古墳は早くに完全消滅していたと考えられる。

註

註1 梅原末治「宇治町丸山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告 第4冊』、京都府、大正12年。

4. 宇治市街遺跡(宇治妙楽162)発掘調査概要

(1) はじめに

本発掘調査は、宇治妙楽162他において、トーア株式会社が計画した共同住宅建設に伴い実施したものである。

調査地は、都市計画道路ぞいの一角にあたり、宇治市街地を東から西へ流れる小河川、井川の南岸部にあたる。このあたりの標高は、16～17m程であり、宇治市街地の中でも最も低い地帯である。

調査地は、駐車場として利用されており、周辺を宅地・店舗等で囲まれている。トレンチは、駐車場のほぼ中央部に設定し調査を実施することとした。

過去における付近での調査成果としては、南西50m地点にある京都銀行宇治支店の改築に伴う調査で、13世紀初頭の井戸と多くの土器を検出している。

現地調査の実施期間は、平成2年2月19日より同年3月22日までであり、発掘調査面積は115m²である。

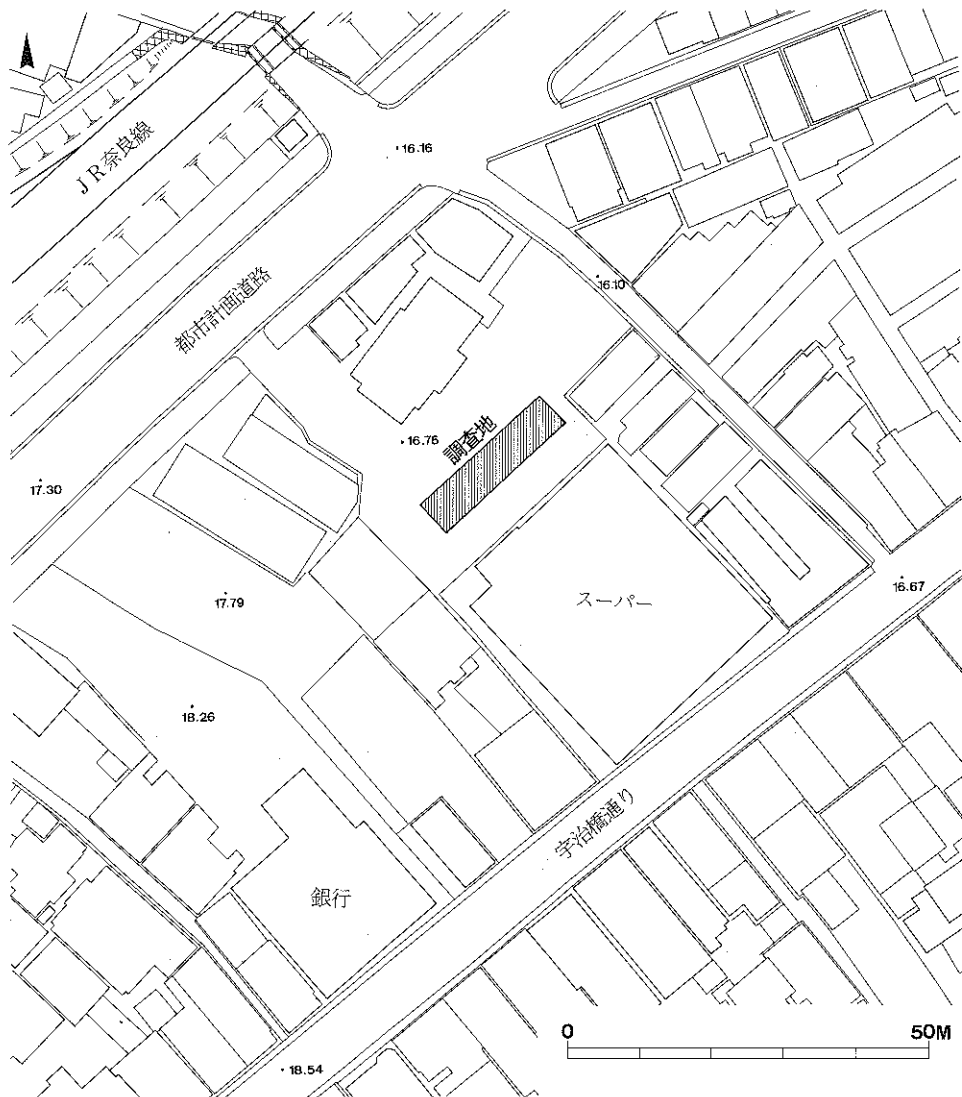


第17図 調査地位置図(1:5000)

(2) 調査の概要

調査は、駐車場の地形にそって幅5m、長さ23mのトレンチを設定し、トレンチラインにそってアスファルトをカッターにて切断後、パワーショベルにて掘削を開始した。

当地は、現代の宅地化に伴い0.8～1m程の盛土がされており、その下に近代の遺構面、さらにその下に近世の遺構面が存在する。遺構検出を実施したのは、これら層位を除去した後現れた暗茶褐色粘質土上面においてである。この遺構面の標高は概ね15.3m程であり、ゆるやかに東へ傾斜している。検出遺構の概要は、次のとおりである。



第18図 調査地地形図

(3) 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、井戸3、溝2、土塋・柱穴22箇所である。この内、井戸SE01とSE03については、近世後期以降の木組及びモルタル井戸であるため、報告については割愛する。

溝SD01 トレンチ東側の南端部で検出した溝状遺構である。灰色粘土を埋土とし、木製品及び自然木等の有機質、土師器・須恵器片が出土した。

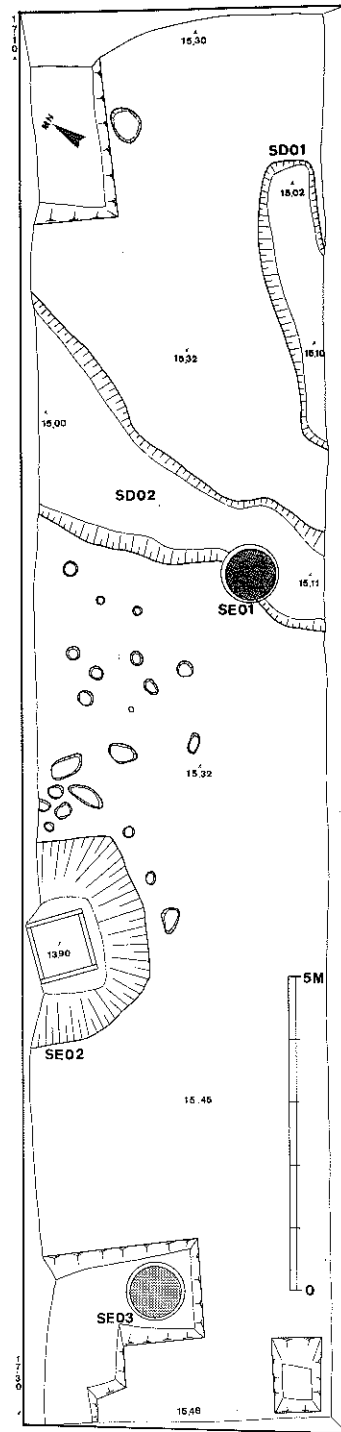
溝SD02 トレンチ東部で検出した南北溝。幅は1.5～3.5m程と一定せず、深さは、0.3m程を測る。自然流路の可能性が高い。埋土内からは土師器・須恵器片などが出土した。

井戸SE02 トレンチ西部の北壁ぞいで検出した木組井戸。掘方は、径3.2m程の不整形円形であり、2段掘り状に掘り込まれている。掘方中央に方形の木組井戸枠が検出された。井戸枠の構造は、長さ110cm、幅18cm、厚さ4cm程の角材を柄で結合させた方形枠を最下段に置き、その15cm程上にさらに長さ97cm、幅10cm、厚さ6cm程の角材で組んだ方形枠を置き、この外側に板材をを立てることにより方形井戸枠を成していた。外側に立てられた板材は、幅6～16cm、厚さ2cm程で、現存長の最も長いものは130cmを測る。この板材を一辺につき5～7枚立ててならべていた。

井戸最下層よりの出土遺物はなく、井戸の使用停止後、しばらくしてから、多量の土師皿片を含む褐色砂質土により埋め戻されていた。

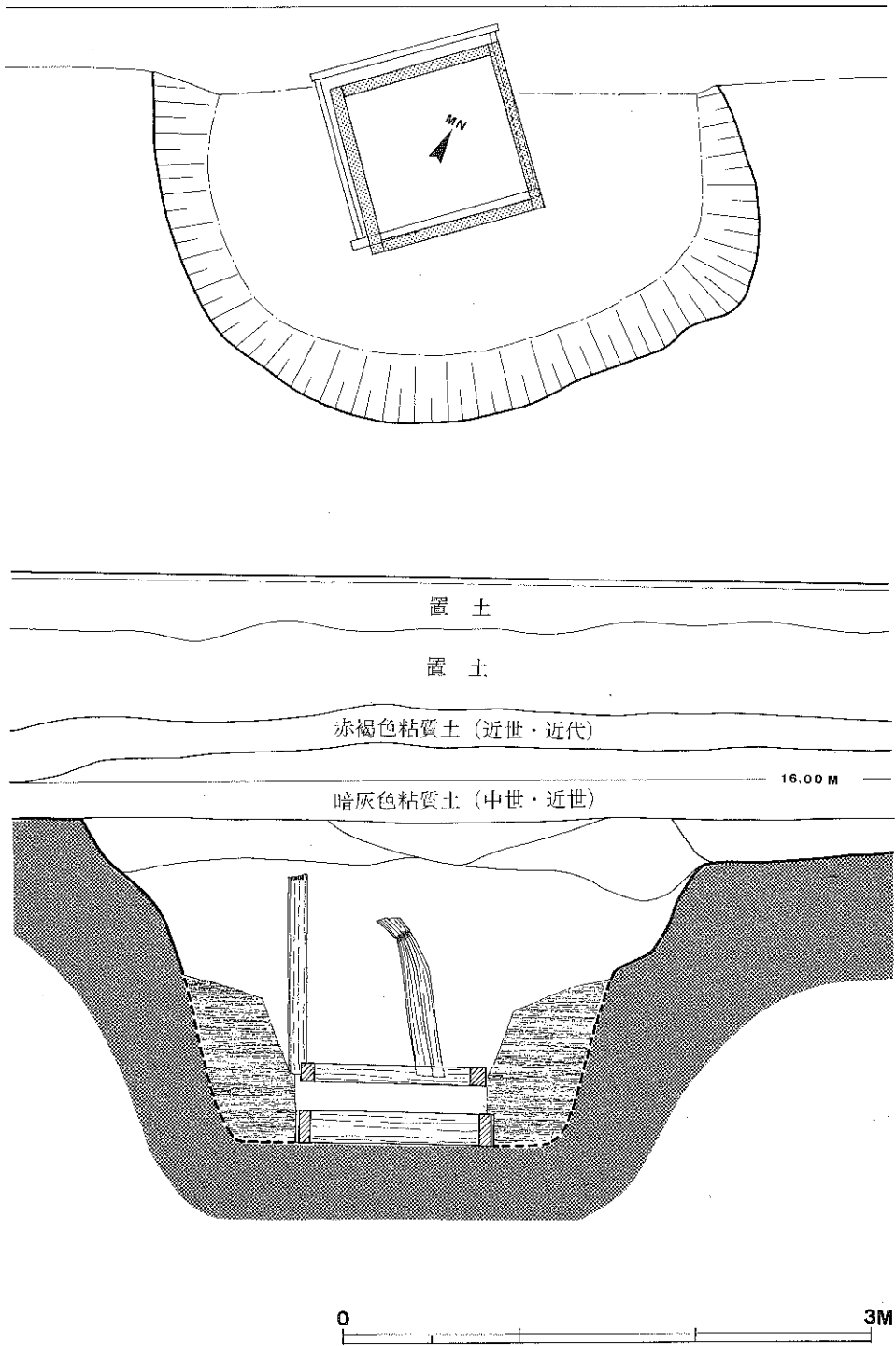
また、調査時においては、井戸底からの涌水は認められなかった。

諸遺構 上記の遺構の他に、主にSE02とSD02との間の部分で不定形の土塋・柱穴と思われる遺構を検出した。いずれも浅く、性格等については不明である。



第19図 遺構実測図

4. 宇治市街遺跡(宇治妙楽162)発掘調査概要



第20図 井戸 S E 02実測図

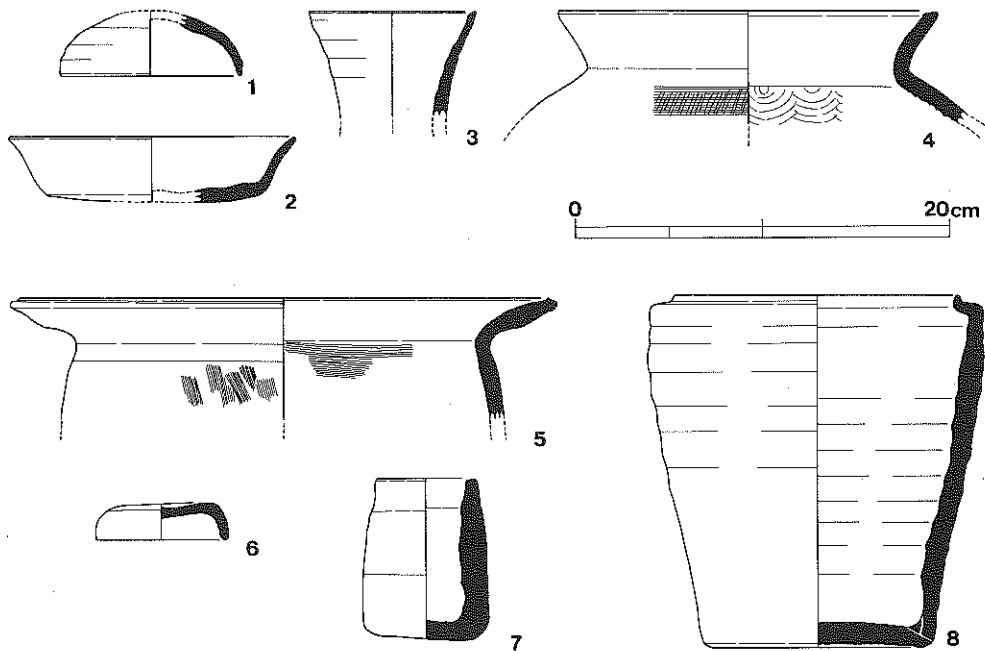
(5) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦器・木製品などで、コンテナ箱にして約10箱分程が出土している。概して破片化しているものが多く、図示できる個体は少ない。以下に主要遺構の遺物の概要をのべることとする。

溝S D01出土土器 本遺構より出土した土器は、若干の土師器の甕体部片と50片程の須恵器片である。須恵器の大半は、甕の体部片であり、少量の6世紀末から7世紀前半の杯片を含む。遺物の中心年代は7世紀後半から8世紀代と思われる。

溝S D02出土土器 本遺構出土の土器は、S D01と同様に須恵器の体部片を中心に50片程である。年代的には、7世紀前半の杯(第21図1)や7世紀後半の杯(第21図2)などを少量含むが、大半が8世紀代に比定されるものである。

井戸S E02出土土器 本遺構より出土した土器類は、土師皿・須恵器の杯・瓦器碗・灰釉碗などが認められるが、量的には土師皿が他を圧倒している。出土量はコンテナ箱に6箱程である。土師皿は形態的に次のA～Cの3種類に分類できる。A(第22図1・2)は、口縁部が「て」字状屈曲するもので、口径10cm程を測る。Bは、通常の内湾気味の口縁部をもつものであるが、法量的に2別できる。一つは口径10cm程の小皿(第22図3～8)であり、もう一つは口径15～16cm程の大皿(第22図9～18)である。特に後者には口縁部を2段にヨコナデす



第21図 溝S D02包含層出土遺物実測図

4. 宇治市街遺跡(宇治妙楽162)発掘調査概要

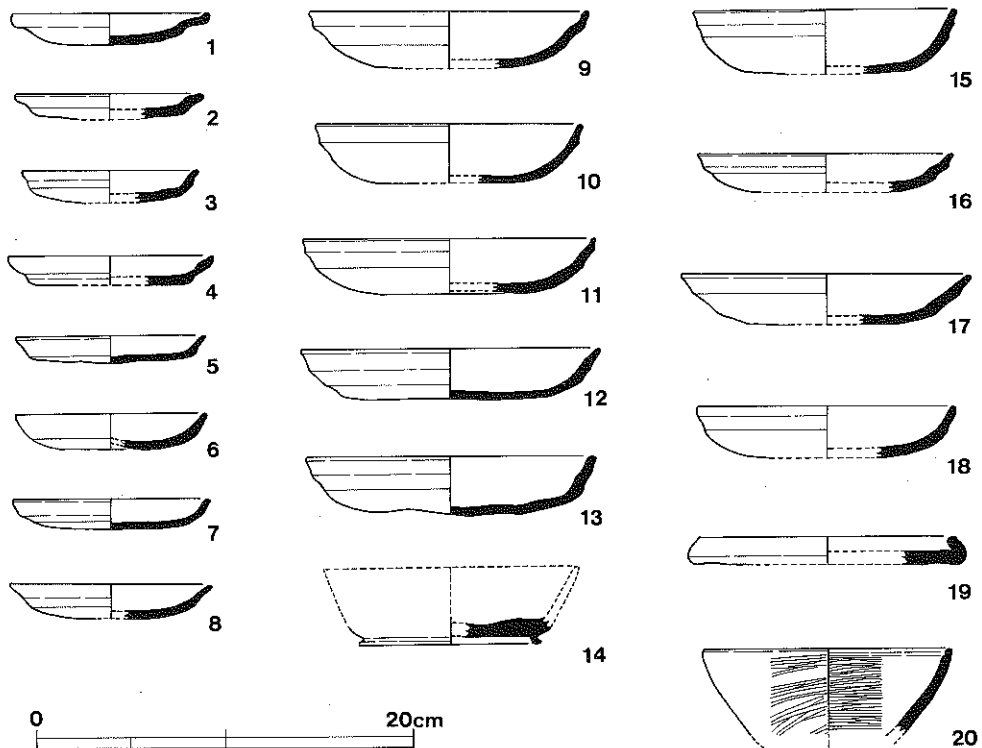
るものが顕著である。C(第22図19)は、口縁部を内側に折り曲げるものである。それぞれの出土比率は、Aが24%、Bが72%、Cが4%である。

年代的には、12世紀後半を中心とするものと思われる。

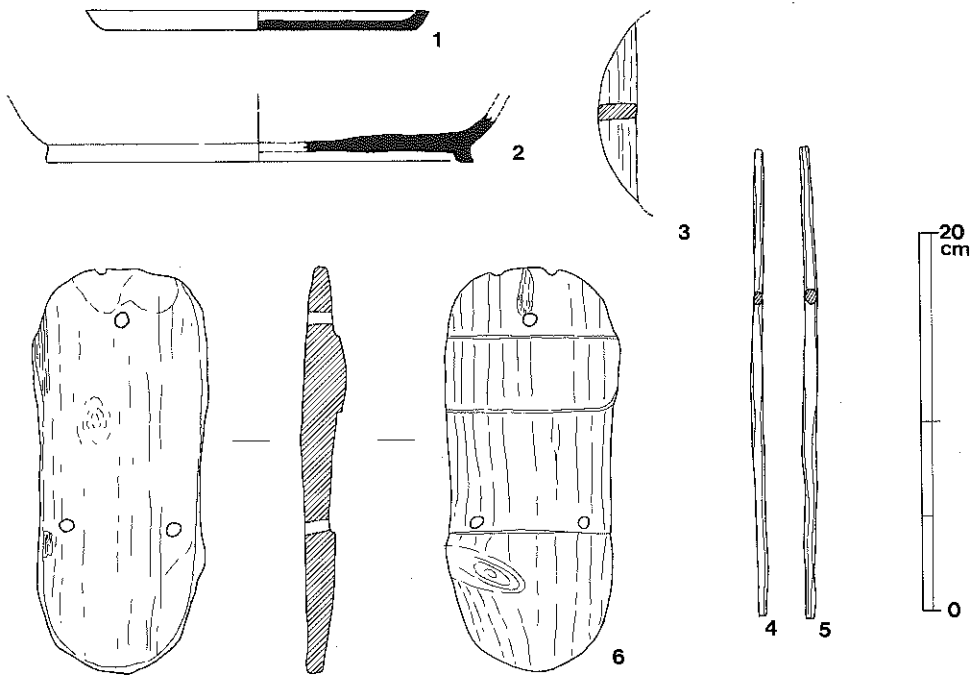
包含層出土の土器 包含層から多様な土器類が出土しているが、図示可能なものを紹介しておく。第21図5は土師器の甕であり、概ね8世紀代に比定できる。第21図6・7は塩壺の蓋と身であり、ともに完形品である。16世紀後半から17世紀代のものと思われる。第21図8は備前の水指であり、焼成・発色とも良好な優品である。16世紀に比定できる。この他に18世紀に比定できる伊万里の碗等が出土している。

木製品 土器類の他に木製品が各遺構より少量ではあるが出土している。第23図1・2は溝S D 01より出土したもので、1は皿、2は盤の底部と思われる。第23図3～5は、溝S D 02出土のもので、3は小型の曲物の底板の一部である。4・5は箸であり、長さ25cm程を測る。第23図6は、包含層より出土した下駄である。この他に、井戸S E 02内より箸の破片が出土している。

今回出土した遺物の年代は、上記のごとく7～9世紀にかけての一群と12世紀後半の一群とにはほぼ大別でき、検出面上では近世のものを除きその他の時期のものはない。



第22図 井戸S E 02出土遺物実測図



第23図 出土木製品実測図

(5) ま と め

今回の調査成果の概要についてのべてきたが、ここで整理をしまとめとしたい。

1. 良好な遺構の検出はなかったが、6世紀後半から9世紀にかけての土器類が検出されたことは、宇治市街遺跡の成立過程を窺う上で注目すべき事と思われる。今回の調査で出土したこれらの土器は、出土遺構の状況から考えて、付近に存在する当該期の集落から移動したものであることは疑いなく、本概報が収録する宇治壱番46の調査成果と合わせて考えれば、比較的広い範囲の中で、古代の集落が展開している可能性がある。

2. 井戸S E 02は、検出状況から考えて一般庶民の使用した井戸とは考え難く、12世紀中葉以降、平等院を中心に付近に造営された藤原一門の諸別業などに関係する可能性がある。藤原氏等の諸別業の遺構については、今までのところ検出しておらず、今後、当遺跡におけるこれら平安期の遺構検出は、諸別業の位置・範囲を確定してゆくうえで重要な要素となっていくと思われる。

最後になったが、本報告をまとめるにあたり、京都府埋蔵文化財調査研究センターの伊野近富氏にご教示を受けた。感謝する。

6. 三室戸寺子院跡出土木製品樹種鑑定報告

(1) はじめに

本報告は、本市教育委員会が昭和63年度に実施した標記の遺跡の発掘調査において出土した木製品の樹種の鑑定を徳丸始朗氏に依頼した鑑定結果の報告である。

当遺跡の調査概要については、『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第14集』に収録してある。遺構の年代は、井戸 S E 27が15世紀後半、包含層は12～14世紀頃である。

(2) 樹種鑑定結果

徳丸 始朗

宇治市教育委員会が実施した昭和63年度三室戸寺子院跡発掘調査において、出土した木製品等の樹種鑑定を行ったので、その結果を報告する。

なお、鑑定に際しては、京都大学名誉教授島地 兼・京都大学木材研究所助教授林 昭三両氏のご指導を仰いだ。付記して謝意を表する。

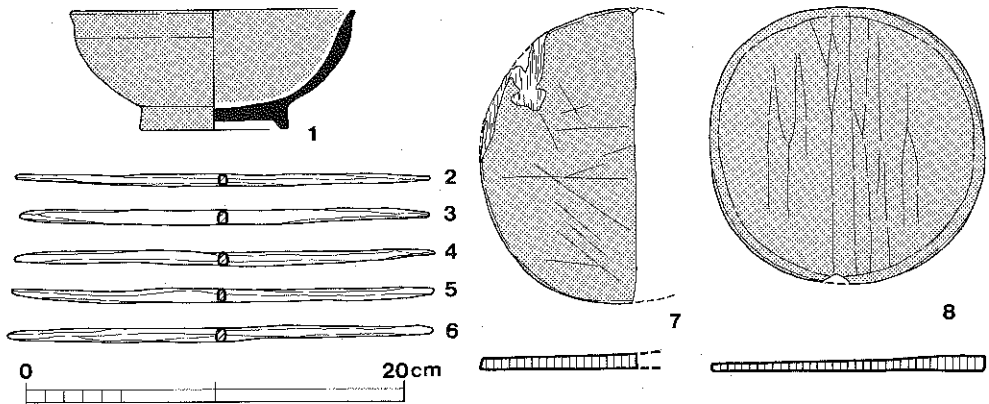
樹種鑑定の結果は、表1のとおりである。

同定するのに際し手掛かりとなった特徴は次のとおりである。

(ケヤキ)

木口面：環孔材。年輪界に沿って円形道管が1列に明瞭に並んでいる。

板目面：放射組織に鞘細胞が見られず、上下の端の細胞は少し大型で、結晶らしい物がみられた。



第25図 井戸 S E 27出土木製品実測図

表1 樹種鑑定結果

出土場所	製品名	樹種	備考
Bトレンチ	漆器椀	ケヤキ(Zelkova)	
井戸SE27	曲物底板	ヒノキ(Chamaecyparis)	第25図7
〃	〃	〃	第25図8
〃	漆器椀	ブナ(Fagus)	第25図1
〃	箸	スギ(Cryptomeria J.)	第25図2～6
SK34	柱根	サクラ属(Prunus)	

(ブナ)

木口面：散孔材。多数の道管がほぼ平等に散在。

板目面：放射組織には単列のもの、数列のもの、広放射組織の3種類があり、特に広放射組織は、紡錐形をしている。

(ヒノキ)

木口面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は極めて狭く、晩材部には樹脂細胞が点々としているが、その数は少ない。

板目面：分野壁孔が典型的ヒノキ型であった。

(スギ)

木口面：ヒノキにくらべて早材から晩材への移行は急であり、晩材の幅が広い。樹脂細胞は晩材部に比較的多く早材部ではごく稀である。

板目面：分野壁孔は典型的スギ型である。

(サクラ属)

木口面：散孔材。道管は平等に分布し、赤い着色物質のつまっているのがみられる。

板目面：放射組織は1～5細胞列の異性である。